
銀魂【会食襲撃篇】

氷面鏡 白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂【会食襲撃篇】

【Nコード】

N8344F

【作者名】

氷面鏡 白

【あらすじ】

万事屋に、幕府が主催する天人との交遊会食会場の警備の依頼が来た。渋々警備に行った、万事屋が待ち受けていたのは！！そして…銀時達の盟友がついに始動する。

零：強力な駒は守った方が勝負に有利だ

京は雨雲が包み込んでいた。

ドス黒い空から冷たい雨が街の灯りをおぼろに輝かせて降り注ぐ。

その中で流れる川に一隻の屋形船が黒い水面をゆっくりとかき進む。

三味線の物悲しい音色を乗せて

「……後は江戸に向かうだけだなア：ククッ」

音色の主は、窓辺に座って三味線を弾きながら不敵に笑う。

仄かに船内を照らす行灯（あんどん）の灯りが行き届かない為、薄暗く彼の顔を隠していた。

彼の炯炯（けいけい）とした右目を、話し掛けた人物に向ける。

その人物はやはり顔は闇に隠れており相手の視線を感じると奥から、優しい声でこう話す。

「……久しぶりですねえ、貴方と組んで活動するのは役人の料亭を攻めに行った時以来です。」

話の内容とそれを話す声色が噛み合っていない。

「まあな……、お前は重要な駒だからな、俺が直々動く時まで残さねえーとな、な……。」

そう主は、優しい声色の人物に問い掛けようとした時、雷が轟き閃光が走る。

その閃光で船の中がはつきりと浮かび上がった。

「玄詠。」

主…高杉晋助は、目線を送っている人物をそう呼んだ。

「そうですね……晋助。」

玄詠と呼ばれた男が四角い黒斑眼鏡をクイツと片手で上げ、ニッコリと腹黒そうな笑みを浮かべていた。

告：授業参観は断ることが出来る（前書き）

初めまして、白と申します。

ぐたぐたな文章になるかと思いますがよろしくお願いします。

杏：授業参観は断ることが出来る

翌日

「俺達が警備員やれだ」と。

颯（しか）めっ面 で相手の顔を覗き込む銀髪の無造作な天然パーマ坂田銀時は、テーブルに両手に力を加え、前に乗り出していた。

「ええ、明日の午後幕府が主催する”天人交遊会食パーティー”があるんですけどその警備に……」

「冗談じゃねえ！なんで、か弱き一般市民にそんな事させるんだ？」
依頼人は銀時の近すぎる顔に若干引き気味で困った表情を作り依頼の内容を銀時の言葉で遮られた。

「自分でか弱きって言うな！……スイマセンそういう仕事は、僕達ではなくて真選組の仕事だと思っんですけど。」

大人しそうな少年志村新八はそうツツコンで、正論を言う。

確かに、こういう類（たぐい）の仕事は、特別警察真選組の出番なのだが。

「税金泥棒は、きつと仕事放棄ネ。」

酢昆布をソファーに伏せた体勢で、しゃぶるチャイナ娘神楽は平然と毒を吐く。

「神楽ちゃんンン！！駄目だよそんな事言っちゃ。」

「私は本当の事を言ったネ、本当の事言っては駄目アルか？」

「いや……そういう事じゃなくて。」

「なんだヨーはつきりしたまえ少年！」

「なんで説教口調？」

「少年……沢山の説教を浴びながら大人の階段を上るアル。」

「意味分かんないよ!!」

ギヤーギヤーと神楽と新八の言い争いは続く。

「で…なんで、そんな依頼を？」

銀時は言い争いに制裁する事をせずに、ソファーにだるそうに深く腰掛けて問い掛ける。

すると、依頼人は重い面持ちで話す

「実は…松平様が、明日は栗子の授業参観日だから、悪い虫がつかないよう。警備が必要だから無理と仰っていました。」

「何その断り方!? 授業参観で仕事休むお母さんのノリですかコノヤロー!!」

銀時は思わず立ち上がって、ツツコム。
いくら警察の上官…と聞いて呆れる。

「理由がまともじゃないですね…なんだよ悪い虫って。」

新八は苦い顔で、ぼそりと呟いてツツコム。

「ほら! やっぱり仕事放棄ネ。」

神楽は、えへんとどこか誇らしげに胸を広げる。

「……ですから、真選組が動けないんです…困った私は悩んだ末。」
「ここに来た…って事か、あー……その辺の岡っ引きに相談してください。」

銀時は気だるそうに答えると、頭を掻きながらその場を去ろうとす

る。

恐らく理由がばかしくて、やる気が幻滅しただろう。

「銀さん!!」

「銀ちゃん!!」

新八達は銀時をひき止めようとする。

「だと思いましたよ、じゃあ…この茶封筒はキャバクラすまいるのチップにしますよ。」

依頼人はあきらめたような表情で懷から、厚みがある茶封筒を取り出す。

中身は、依頼人の発言で伺える。

銀時は勿論、聞き逃せずぴくりと耳を傾けてちらりと臙脂（えんじ）の死んだような眼で、茶封筒を見るなり立ち止まった。

「是非!!やらせてください!!」

電光石火の如く、一瞬で依頼人の所へ行き動機はがめついが依頼を引き受けてしまった。

第一話 終

「あれえ!! もう終わりですか!？」

『五月蠅（うるさ）いダメガネ、作者（かみさま）が終わりと言ったら終わりなんだよ。』

「いや、アンタの方がダメガネでしょ、銀さんみたくグータラに過ごして!!」

『イインダヨ学生だから。』

「それ…言い訳ですか?」

式：似たもん同士の喧嘩は譲り合えない。

ある江戸の橋の上で

無地の白い垂衣が付いた市女笠を被る人物：久坂玄詠（くさかげんえい）と編み笠の派手な着流しを着た人物、高杉におどけた口調でこう話し掛ける。

「江戸なんて…久しぶりですね…ねえ晋ちゃん。」

「……晋ちゃんって呼ぶんじゃないねえ。」

本日何回目だろうか、高杉は舌打ち混じりで玄詠を黙らせようとする。

不機嫌オーラが漂っていた。

玄詠は昔から己を茶化す時、暇潰しの時に”晋ちゃん”と必ず呼ぶ、当初は直ぐ様反撃をしたが。

今となつては、慣れてきたのか二三回呼ばれたぐらいで動じなくなつたがやはり……度が行き過ぎると

「つれませんねーし・ん・ち・や・ん・は。」

垂衣をわざわざ片手に上げて、にっこりと楽しそうに玄詠は笑った瞬間。

高杉の細い細い青筋がブチツと大きく音をたてて切れた。

仏の顔はなんとやら…嫌な事を数回もやられたら、誰だって怒るで

あろう。

「そうか…テメエそんなに死にてエーのか。」

ドスを利かせた低い声で言いながら納刀している、刀の束を掴んで
抜刀寸前の体勢を作り、玄詠を鋭く睨む。

「嫌ですよ…俺は出来るだけ長く生きたいので。」

高杉が放つ殺気に怯えず平然とした態度で、答える。

「…そんなに逝きてえーのなら…逝かしてやる。」

高杉は、すうと刀を抜いて構える。

「望む所ですよ。」

高杉の挑発に乗り市女笠を外し、コンタクトを装着した玄詠の優しく微笑む素顔をさらして首に留めると鞘から刀を抜き構える。

二人は対峙し、斬り掛かろうそんな雰囲気だったが。

「はい、そこまででござる。」

制裁しようと思いついたのは、彼らと同じ鬼兵隊所属の人斬り河上万斎。

なぜ万斎が此所にいるかというと。

隊員が二人の衝突が心配で、仲介役として様子を見てこいと頼まれた為である。

整った顔は優男、物腰の柔らかそうな態度の玄詠。

鷹のような鋭い隻眼、基本命令口調の高杉。

外見は正反対だが中身は、似た者同士である。

その為、このような衝突も少なくはない。

今朝も「クソ眼鏡」「クソ包帯」

などと火花を散らして、言い争いを行われていた。

万斎曰く「よく…飽きもせぬな」と二人の様子を見て呆れていた、そして今も。

「ちっ、万斎…止めるんじゃない。」

「そうですよ…折角五月蠅（うるさ）い人が消えるんですから、邪魔しないでください。」

二人は殺気を放ちながら、万斎を見る。

表情も高杉は怒りに満ち不機嫌そうに眉を寄せており。

玄詠に至っては普段の優しい瞳ではなく、凜とした目付きになりさ

らに、品のある妖しい笑みを浮かべていた。

心なしか背後に龍と虎の対立の絵が、浮かび上がっている。

「……下見に來ただけで、なんで斬り合いになるでござるか？」

万齋は、二人の放つオーラに少々引き気味になりつつも、呆れたように聞き返す。

攘夷浪士の中でも、最も過激で危険な男とそれに次ぐ男の衝突に踵（きびす）を返さぬ、万齋に拍手を送りたい。

「この…女（あま）野郎が悪リイ。」

「なんですか？女（あま）野郎って…俺、正真正銘男ですよ。」

「その女みてえな…顔（つら）と、女モンの笠を被ってるからだ。」

「貴方こそ、女物のような着流しを着ているではありませんか。」

「”ような”だろ…ククツ、女モン被るお前とは違いエんだよ。」

「なんです？」

「あ、あつ、なんだよ？」

両者、睨み合い一步も譲らない。

ここまで言い合つと、第三者から見て仲が良いのか悪いのか……。

そして完全に蚊帳の外となった万斎は、二人の言い合いを見てこう思った。

「本当に大丈夫で…ござるか？」
とこれからの事を考えると、どこか不安を感じていた。

第二話 完

式：似たもん同士の喧嘩は譲り合えない。（後書き）

えー…この話は玄詠と高杉の関係と、玄詠について詳しく紹介をする。目的で書きました。

二人の言い合いは、書いていると、楽しくなります
そんな僕は、Sなんでしょうか。

参：漫画の敵キャラが計画をばらす時、主人公への親切ではなく読者への配慮が

タイトル長っ！！

参：漫画の敵キャラが計画をばらす時、主人公への親切ではなく読者への配慮だ

翌日、会食会場。

「んんっ暇だな、オイ。」

「アンタ、少しはやる気を出せよ……せつかくの仕事なんだから。」
「といっても…数合わせだけアルな。」

新八以外やる気がない三人は、10階建てビルにある会場の扉の前で警備をしていた。

実は外には数人警備の者がいるのだが、依頼前は中の警備するのは人材が足りなくなっていた。

つまり、補足として彼らは依頼されたのである。

「俺達はアレか、レギュラー争いに負けた補足部員かよ。」

銀時は、少し不機嫌そうな表情で口を尖らせて文句を言う。

「多分…依頼人さんは、強敵に出会さない限り、一番衝突しにくい場所を選んだ事は……それなりの気遣いだと僕は思いますけどね。」

新八は、補足でも仕事を与えただけではなくこういった気遣いまでしてくれた。

依頼人に感謝を、全然やる気でない二人に伝える。

「ようするに…俺達ア最後の砦みたいなポジ？」

「RPGでいったら…ラスボスの前に戦う中ボスぐらいのポジアルか？」

銀時は気だるく、神楽は扉を少し開け並べてある料理を眺めていた

が、新八の言葉を聞いて振り向いて、大きな目を爛々と輝かせて二人は言う。

「平たく言えばそんな感じですね。」

新八は、眼鏡を上げて答え構えていた木刀を腰に差す。

「…ま、このまま何事もなかったら…楽しんで大金が手に入るから…
…ん？」

銀時は伸びをして、欠伸混じりの口調で何かに気づいてそう言い掛けぴたりと体が止まる。

その目線の先には……

狂乱否混沌の貴公子でお馴染みのヅラ否桂小太郎が、裏口から続く階段の影で、辺りを見渡している。

この様子だと、私服にも関わらず銀時達に気づいていない。

そこで銀時君は、立ち上がり無言で怪しすぎるヅラ君に向けて木刀を投げてみました

「作者アアア！何悪のりで文体変えてんですか！？、これは小説ですよー！！」

新八のツツコミは虚しくも、作者（かみさま）には届かない。しかし、桂の鳩尾（みぞおち）は木刀が作り出した重い打撃と共に届き、「ぶげふうっ！」というどこかで聞いた事がある悲鳴をあげて、崩れるように床に伏せた。

そんな桂の状態など、お構いなしに銀時は桂に接近し、「不審者発見したぞ…お前ら」そう気だるげに言うと、黒いブーツでごりごりと桂の頭を置く。

「ふ…不審者じゃない桂だ。」

意識のなかった桂は目を覚まし、お決まりの台詞を弱々しい声で言い放つ。

「なんで、ツラがこんなトコにいんだよ。」

銀時は、そのままの体勢で桂を見下ろして問う。

「ツラじゃない桂だ、その問いそのままバットで打ち返すぞ、銀時。」

「俺ア仕事なんだよ、というか…どうやって入ったんだ？」

銀時の足を桂から解放し、着物を片方崩している懷に手を入れて帯に置くとそう聞き返す。

確かに、外には数名警備が配置されている筈だ。

しかしテロリストである桂が侵入すれば当然、騒ぎになる…それが全くと言っていい程ない。

「裏口から潜入し、非常階段を使って昇ってきた。」

今までの疲労が出てきたのか肩を切らしながら、額に微少の汗を流してそう答える。

桂の答えからどうやら守りは、前だけらしく裏口は警備が配置されていない事が推理される。

「ヅラ…ここ八階アル、エレベーターは使わなかったアルカ？」

神楽は、会場の様子を眺めるのが飽きたのか常備の酢昆布をしゃぶりながら、銀時達の会話に横槍を入れ問う。

「リーダー、エレベーターは防犯カメラがある…それに撮されたらバレてしまうだろう。」

言い方に気づかずに、真顔で答えながら衣服に付いた、埃を手で払う。

「カメラって言い方…古いんですけど。」

流石、作者（ぼく）にもツツコめる新八は、当たり前のように桂の言い方にツツコンだ。

「さてと、コイツをとつと捕まえて田辺さんに報告するわ。」

「はい、無線。使い方…分かってますよね。」

「縄アル。銀ちゃん！思いきって、ヤツを縛るアルよ。」

「なんのプレイ?!ここはそういう店（とこ）じゃねえーから!」

銀時は二人に渡されたものを受け取ると同時に、神楽にツツコミを入れて、一応御用となった。桂を縛ろうと近寄り始めた。

因みに田辺さんとは今回の依頼人であり、警備を仕切る人でもある。

「ちよつ、貴様ら！縛る前に動機とか聞かぬのか！？、読者にも伝わり難（にくい）いであろう！！」

桂はそう叫んで、迫ってくる盟友に、後ずさりをして逃げようとする。

がいつの間にか、背後には新八達がそれを防いでいた。

「現実には常に問答無用なんだよ。」話は署で聞くから”的なノリなんだよ！！現実はい」

銀時は、縄を両手に握り妙に説得力のある発言をしながら桂に迫っていく。

「待て！落ち着け、俺はこの会食に幕府の重鎮が出席すると聞いて、是非江戸について話し合いたいと思ひ此所に来ただけだ！」

なんだかんだ言って、結局動機を話した桂はうろたえながらも銀時を宥（なだ）めようとする。

「なんで、国について話し合いたい奴が刀ぶら下げてんだ？オカシイだろ！武器持った奴が、平和についての議会に出ると同じぐらいだ。」

「これは護衛用だ！！ほら、かの有名なオバナ氏も持っているではない……。」

「ガセネタ流してんじゃねえーよ！オバナさんに失礼だろ。」

新八は桂の言葉を遮り、ナイスなタイミングでオバナ氏の謝罪を含めてツツコム。

「新八の言う通りネ、罰として丸坊主にするアル！」

「リーダー、それはちよつと……。」

「俺も神楽と同じだ、全部人のせいにしてお前は今の政治家かコノヤロー。」

銀時と桂の距離が近い、後一步踏み出せば桂を捕まえられる。

銀時は、一步踏み出そうとしたその時。

突如、大きな爆発音が鳴り響きビル全体が唸（うな）りながら揺れ始め、会場はあまりにも突然な出来事だったので、悲鳴や食器の割れる音が聞こえ。

そして、明らかに過激派の攘夷志士による仕業だと分かると、会場全体は恐怖に包まれた。

肆：言い出しっぺが結局、リーダーになる（前書き）

気づけば、総アクセス1000HIT達していました。
びっくりです。

これからも、グダグダな小説を応援よろしくお願いしますm
ー（

肆：言い出しっぺが結局、リーダーになる

「ちよっ、これどうなっているんですかアア!!」

新八はビルの揺れに、体を少しよろめきながらそう叫ぶ。

「ビル（コイツ）もとうとう、自立する時が来たアル。」

神楽は、ビルが勝手に動く勘違いして、眼を閉じてうんうんと頷く。

「自立ってなんだよ。」

間髪入れずに新八はツツコム。

「オイ、ツラア説明しろ。」

銀時は、桂の髪を鷲掴みし近くに寄せて、そう問う。

どうやら、謎の爆発の原因は桂だと考えているらしい。

「痛ただだっ、俺は何も知らぬ!」

髪を引っ張られても、きつぱりと無罪を主張する桂に対して、銀時は怪訝な顔で答える。

「とぼけるんじゃない、ここに爆弾仕掛けそんな奴はお前しかいねえんだよ。」

「だから、俺は無実だ爆弾など仕掛けてはいない。」

「お前が持っている、トランシーバーで貴様らのリーダーに聞けばよいだろう?」と付け足して、桂は無罪の主張と提案を出した。

銀時は「分かったよ、連絡すればいいんだろ?」と面倒臭そうな表情で頭を掻き、懷から無線を取り出してスイッチを入れる。

「えー、こちら坂田銀時。」

「あ、銀時さん、恐らく過激派の攘夷志士達が裏口に爆弾を仕掛けていたんですよ。裏口に行くとか敵が襲ってきました。」

田辺の声に混じって、鋼同士ぶつかり合う音や断末魔の声など無線の向こう側から聞こえた。

田辺がいる場所が、修羅場と化している事が一目散…いや一耳散で分かる。

「……なあ、田辺さん地上（そっち）で、”高杉晋助”って男見掛けなかったか？」

銀時は田辺の話を聞いて、まさかと思いつながら桂の髪を解放し、問い掛ける。

「見掛けませんでした。」

「そうか……。」

鬼兵隊仕業ではないそう感じて、無線の電源を切ろうとする。

「高杉の代わりに…久坂玄詠がいますと、部下から報告を受けました。」

田辺はあらかじめ、指名手配犯、特に過激派の攘夷志士らの顔を全て覚えてきたのだ。

勿論、高杉らを知っているのもその為。

「!!」

銀時は玄詠の名を聞くと、目を丸くし嫌な汗が頬を伝う。

銀時が驚くのも無理はない、彼は同じ学舎で共に育ち、戦後行方不明になっていた、盟友がこんな形で再会するとは思わなかっただろう。

「銀さん？」

新八は、銀時の様子を見て心配そうな顔で、声を掛ける。

「……いや、なんでもねえ。」

銀時は小さな声で、気づかれないよう誤魔化した。

「男は黒髪のパニーテールに四角い眼鏡……久坂玄詠に間違いありません。」

「そーですか、じゃあ……田辺さん殺されねえよう気を付けろよ。」

「了解です。」

そこで、無線の電源がブツンと切れた。

「テメーら、二度説明すんのダリイから一回しか言わねえーから、よく聞けエー！」

無線を懐に入れると、銀時は何か作戦を浮かんだのでその説明のフリを皆に言う。

「なんでありますか！大佐っ。」

神楽は、敬礼をして言う。

神楽はとある軍に所属しており、銀時がその大佐という勝手な設定だろう。

「銀時、もしかして俺も入るのか？」と問う桂を無視して、銀時は話を続けた。

「まず、オメーらは会場にいる奴らを非常口まで誘導しろ、続いてヅラ、お前はそうだな……裏口の雑魚食い止めとけ。」
名指しで、作戦を気だるげな声で説明する。

新八は「銀さんはどうするんですか？」そう問うと、銀時はやる気のなさそうな表情で「俺ア…ボスが来るまで待機だ」と答える。

それを聞いた、ダブルニンジャーはこう反論した。

「ズルいネ！！ラスボスは私が倒したいアル。」

「リーダーであるお前が、殆ど何もしないというのは不公平だぞ！！」

どうやら銀時の役割に対して、己自身でやりたいのか？そう口を尖らせる。

銀時は「文句を言うんじゃないやねえ、それと俺はいつリーダーになったんだ？」と、不満を持った二人の訴えをツツコミで返した。

「あーもういいです！神楽ちゃん行こう。」

新八は三人のやり取りを見て、少々困った表情を浮かべ銀時の作戦を渋々受理して、会場の扉まで行き神楽を呼ぶ。

「この……八方美人が。」

神楽は酢昆布をしゃりながら、小さく毒を吐き扉の前まで寄って、新八と共に混乱する会場に入ってしまった。

「さてと…ッラ、早速仕事だ!!」

二人が会場に入って、数分経った頃。

銀時は、何かの殺気を感じたのか二人の事を心配そうにする桂の腹を思いっきり中段蹴りをして、そう言う。

桂は尻を向けた状態で裏口に向かってゴールインしたと同時に、二人の攘夷志士のうろたえる声と桂の蛙が潰れたような悲鳴が聞こえた。

「さてと…俺は、アイツらの手伝いでも……。」「銀時は何事のなかったように、頭を掻いて扉に向かおうとするが。銀時は、僅（わず）かにだが裏口にいた彼らよりも濃い殺気を感じて咄嗟に愛刀”星砕”を抜いてくると回転し誰かの重い刃を受け止めた。

木刀の鈍い衝撃音が響く。

「殺気…それなりに抑えていたんですが流石、白夜叉ですね。」「どこか聞き覚えのある声が聞こえる。

「デメエは…!?!」

銀時は、声の主の顔を見て見知った顔なので思わず、言葉を詰まらせる。

「久しぶりです、白夜叉いえ…坂田銀時。」「

玄詠は、頬や衣類についた返り血を気にせずに、満面の笑みを浮か

べて律儀（りちぎ）に挨拶をした。

第四話 終

肆：言い出しっぺが結局、リーダーになる（後書き）

遅れてすみません（――）m

時間かけて書いたのに、グダグダになってしまった^^；
夜中に書くのがいけないのかな？

ツラ好きなのに……不憫な扱いをされているのはなぜorz

それでは、次回もお楽しみに

伍：目指す場所が変われば人も変わる（前書き）

2000HITありがとうございますm（——）m
ちよつとしたお礼に後書きで、あるコーナーを勝手にやります。
それは読んでからのお楽しみ。

作者のツブヤキ

ヅラは攘夷組のお母さん

伍：目指す場所が変われば人も変わる

「なあ銀髪、どうやってたらそんな色になるんだ？」

まだ、10代そこそこの高杉は新しく埋まった机に座っている銀時の今まで人々に畏（おそ）れられてきた、髪色や瞳色が余程（よほど）珍しいのか顔を覗き込んで、爛々（らんらん）とした視線で問う。

「晋ちゃん、銀時に失礼ですよ。」

隣に割り込んで来たのは、高杉と同じ年の久坂玄詠、高杉の問いは銀時に失礼だと感じ注意する。

当時の玄詠は眼鏡を掛けておらず。艶やかな黒髪を耳下まで伸ばしていた。

何故、眼鏡をかけるようになったのは少し未来（サキ）の話になるが、その時がくるまで明かさないでおこう。

「デメエ！晋ちゃんって呼ぶな！！」

高杉は、不機嫌そうに眉を寄せ鋭く率直な視線で睨み反論する。

「呼ぶなと言われましても、貴方も呼んでいるではありませんか。」

玄詠は人懐っこい満面の笑みを浮かべて、嫌味っぽくしれっと答える。

玄詠のこの発言を聞いて高杉は彼の胸ぐらを掴み、こう叫んだ。

「俺は対象外なんだよ、このS野郎！！」

「僕”は貴方と違って、短気ではありませんので。」

「話を自然に反れるんじゃないやねえ。短気とSは関係ないだろ。」

「貴方だって、注意したただけで胸ぐらを掴むんですか？これだから今の若者は……。」

「お前も若者だろ？」

「若者ではありません、僕はまだ子供ですよ。」

「んなモン同じだ。」

「違います。」

「んなモン同じだ。」

「違います。」

「んなモン同じだ。」

「違います。」

「んなモン同じだ。」

「はあ……。」

銀時は、二人の喧嘩は呆れてかける言葉もなく、それを傍観していた。

「あの二人の喧嘩は日常茶飯事だ、なあにすぐに見慣れるさ。」

桂は、いつの間にか暴力の喧嘩になっている二人に気づかず、新入りで尚且（なおかつ）塾に馴染んでいない、銀時の隣に正座で座って彼を気遣う。

「ああ……で、アイツらどうすんだ？」

銀時は、例の喧嘩に指を差し出して指しながら気だるそうに聞き返す。

「ん？……！オイ、新入りの前で喧嘩するとは……はしたないぞ貴様ら！」

桂は、直ぐにずんずんと近寄って喧嘩に、平凡な母親が言いそうな

台詞で制裁をする。

「うるせえ、引っ込んでろ。」

「貴方には関係ありませんよ、ヅラ。」

二人は桂の発言に喧嘩をまるで、動きを捉えた浮世絵の如く一時停止をして言う。

三人を例えるなら、注意する母親と、それに反発する反抗期の子供のよう。

「ヅラじゃない桂だ。新入りの銀時君が俺の本名だと勘違いするだろう?」

桂は、苦い面持ちで腕を組んで言い返す。

「別にいいじゃないですか、貴方はどうせヅラですから。」

「なんだ、その言い方は…だいたい喧嘩の発端の八割が久坂だろう。」

「僕はただ、あだ名を呼んだだけですよ。」

反省の影も糞もない、笑顔を浮かべて言う玄詠を見て、桂は「何を言っても駄目か……。」と思い玄詠を諦めて、高杉にこう言った。

「高杉もすぐに手を出すな、ますます久坂が調子に乗るぞ。」

「……………うぜえ。」

高杉は話題にふられたと知った途端、そっぽを向きアンニユイな表情を浮かべて小さく本音を呟く。

相当、桂が鬱陶（うつとう）しかったらしい。「なっ!! 貴様ら、反抗期なのか!」

桂は必死で、反抗的な態度をとる二人をなんとか仲介をしようとする。

る。

しかし桂の態度に二人はうんざりとし、同時に「うるさい」と桂に冷たく言い放った。

桂はそれを聞き思わずショックを受けて、よろめきながら後退をする。

銀時は「……バツカじゃねえーのオメーら。」三人のやり取りを見て笑いが込み上げていたが、我慢できず。そう大きくげらげらとお腹を抱えて笑った。

銀時は生まれて初めて、心の奥底から笑えた。

「銀時。貴方は……朽ちるつもりですか？この世界と共に……。」

玄詠は殺気を込めた、漆黒の瞳で銀時を睨み唐突に問う。

刃の圧す力が段々と強くなっていくのが、木刀にも伝わっている。

銀時は、それを余裕な笑みで受け止めながらこう答える。

「俺は、自分（テメー）のルールで生きているだけだ。」

風の切る音と共に玄詠の刃を払い、その瞬間バックステップをして態勢を整える。

「銀時…松陽先生を攫（さら）った、時代の影を根刮ぎ狩らないで、そのままにしているんですか！俺は、それが気に入らないです！」

玄詠は束を強く握りしめて、ギリリと齒軋りをすると素早く前に出て、中段構えで銀時の横腹に沿って斬ろうとする。

銀時の目には、幕府に対して、沸き上がる怒りと憎悪を抑えきれず、瞳孔が開いている玄詠と泣いている幼い玄詠の顔が重なった。

剣が鈍る。

「……っ。」

首を振って我に返る、しかし防ぐのが遅かったのか、玄詠の刃が銀時の腹に届いた、その勢いで倒れ往く中、玄詠の鳩尾に真っ直ぐに突きを食らわす。

「がはっ。」

重い一撃で、玄詠はあまりの痛さに思わず膝まつき、鳩尾を手を当てた。

「ヅラにも言っただが……俺達の戦いは終わったんだよ、敵討ちなんざ今時、流行らねえーんだよ。」

ゆっくりと立ち上がると、銀時は気だるげな眼から凜とした眼で苦しむ玄詠を眺め言う。

「ククッ……敵討ちですか、いいえ違いますよ…復讐と言ったところですねえ。」

目付きが変わった時点で”仮面”が外れた玄詠は、そのままの状態で喉を鳴らして笑い答える。

態勢を整え、銀時を見た瞬間攻撃されそうになっていたので咄嗟に防御する。

「その眼は、白夜叉の眼……久し振りに見ましたねえ。」

食い込む刃を白刃で押さえながら、冷たく妖艶な笑みを浮かべて銀時の現時点の眼を言う。

「お前こそ、相変わらず歪んだ時の眼じゃねえーか。」

銀時はニヤリと笑って皮肉を言う。

玄詠は、松陽が処刑されたあの日から強すぎる怒りと憎悪のせいで、人格が歪み凜とした目付きになっていた。

「それでも、”ある人”のお陰で歪みを少し、修正しましたが？」

「ある人……？」

「貴方には、関係ない話です。」

怪訝（けげん）な銀時の問い掛けに、余程触れたくないのか玄詠はきつぱりと答える。

「銀時！」

その時桂は敵を一掃し、銀時の様子を見るなりその場に助太刀しように、駆けようとする。

「あ、一つ言うの忘れてました……。」

駆け寄ってくる桂に気づいた玄詠は、刀を強く押しながらわざと聞こえるように言う。

「晋助が…裏口から攻めに来ますよ。」

その言葉に合わせながら、高杉が裏口の階段から現れ背後を向けた桂に斬ろうとするが、桂はその気配に気づき振り替えて瞬時に刃を止める。

「お前らも来てたのか。」

高杉は周りの景色を一瞥（いちべつ）すると、酷薄な笑みを浮かべてそう言った。

もし…松陽がこの場を見ていたら、哀しむのかも知れない…かつての門下生だった彼らが、こうして斬り合いをしているのだから。

第五話 終

伍：目指す場所が変われば人も変わる（後書き）

教えて！！銀八先生

「えー、PN銀魂好きの部員の約八割は腐女子だったのでショックを受けたさんからの質問。

玄詠は、銀さん達と同じように幕末の人達の名前から拝借していますか？もし居たら紹介してください。」

「スバリ、久坂玄瑞（義助）です。

高杉晋作、吉田稔麿、入江九一に並んで松門四天王と呼ばれたり、高杉と彼を並んで”双璧”などと呼ばれ、尊攘運動の先頭に立った人物です。

ある一説によると、頭が冴えて長身で秀麗な美男子だったとも言われています。

頭いいしそのうえ美形と来たら…人間としてほぼ完璧じゃねえーかが、奇兵隊で…英国公使館焼き討ちの時は、副隊長やったり下関で外国船砲撃したりと、以外と過激な攘夷活動していたので、人は見掛けによらずだよな。」

「という訳でワンピース学園の大西！廊下に立ってなさい。」

陸：人には譲れない物がある（前書き）

3000HITありがとうございますm（　　）m

感謝を込めて最後のページにて、重大発表がございます。

作者のツブヤキ

鴨と鷹久の短編小説書きたいなあ

陸：人には譲れない物がある

桂は、高杉の刃を弾いて構えたまま、バックステップで銀時の隣に行く。

「ッラア、そこを退け。」

「退かぬと言ったら？」

「叩つ斬る。」

「…改めて思うが、貴様は本当に変わってしまったな。」

桂は真顔で、心中に溜め込んでいた本音を吐く。

「変わったのは俺だけじゃねエーよ…ククッ。」

高杉は、刀を構え直し言い返す。

「久坂か…：あいつも変わったな、子供の頃、冷酷の”れ”の字もなかったが、今では銀時と刃を交じり合わせている。」

桂は横目で二人の戦いを見る。

低く鈍い音を鳴り響かせ、部外者からは太刀筋が見えない程の早さで攻防戦を繰り返しているのを見、玄詠について少し触れて視線を高杉に戻す。

「一度抜けた牙より、新しく生えた牙は根深く生える…二度と抜けねえようになア。」

高杉は、不気味に薄く微笑みながら意味深な事を言うと同時にそれを聞いた桂の刃を受け止め、桂がこう問う。

「高杉、貴様：久坂に何を吹き込んだ？」

「玄詠の牙を生やし、それを研いだけだ…ククッ。」

「答えになっておらぬぞ。」

桂は刀を左右交互に振り、高杉はそれを受け止める攻防戦が続く。

「…数年前、アイツと再開した時はすっかり丸くなっていた…目付きも餓鬼の頃と同じだ。俺は、牙を生やす為死んだ仲間や先生の事を話した…すると、余程聞きたくなかったのか地面に座り込んで体を震わせながら耳塞いでいた…ククッ、傑作（けっさく）だろ？」

「笑えぬ話だな。」

「そのお陰で、アイツの牙は再び生えて、今に至るってワケだ。」

桂はギリッと歯軋りをして、力強く白刃を振る。

甲高い金属音が物悲しく大きく響いた。

「見損なつたぞ高杉。そこまでして、久坂を仲間に入れようとする。」

「

「その後、アイツ自身から入ってきやがった。俺はどうも言えねえよ。」

桂の刃を弾いて、前へ出て横に斬りかかろうとする、しかし桂は読んでいたので一歩少し飛んで、後ろに退く。

「ようヅラ、これが稽古だったら。もつとよかったのによ。」

「ヅラじゃない桂だ。確かなにな…だが遊びでやってはおらぬ。気を引き締めろ。」

銀時も後ろに退いていたのか、桂を見掛けると緊張感のない声で話し掛け、桂はそれに答える。

「晋助…先程、ヅラと何話していたんですか？」

「…知るか。」

「素っ気ない返事ですね……。」

「無駄口叩いている暇があれば、さっさと殺れ。」

「はいはい、分かりましたよ晋助。」

高杉と玄詠も、刀を構え彼らに対峙する。

両者、どう動くか微かな動きでも見ようと睨み合いが続く。

数分ぐらい経ったのであろう

まだ一步も動かない。

数十分過ぎてもまだ動いていない……

つーかいいい加減に、動けや！！話進まないよ！！

「五月蠅エエエ黙れや、紐パンツ！！テメーのせいだろ！！」

『あー、作者（かみさま）を侮辱したら、存在削除けてーい　つーか、紐パンツじゃないからね！氷面鏡だから！！』

「んなの一緒だろうが！！」

『アンインストール』 アンインストール 』

「歌うんじゃねえー！！なんか腹立つから。」

『ほれ、話続けるよ。』

会場の扉から、新八達が出てきてこう叫んだ。

「銀さん！！会場の皆を避難させました！」

「銀ちゃん、そんな奴構っているより、さっさと逃げるヨロシ。」

元気いっぱい二人の言葉を聞いた銀時は、振り向かず

「お前ら先に逃げてろ。」

と言った。

当然、二人はうるたえた表情を作り反論する。

「何を言ってるアルか、銀ちゃん！！」

「そうですよ、高杉晋助らの計画も潰れたんですし、ほっとけばいいじゃないですか！」

「これは俺達だけで済ましてえ…、馬鹿二人がやらかした事だからな！！」

銀時は、雄叫びを上げて玄詠に向かって、木刀を振り下げようとする。

「そういう事だ、仲間の失態は仲間で拭う、恐らく銀時は貴様らに、

この戦いを巻き込みたくないだろう……。」

桂は銀時の様子を見るなり向かってきた高杉の刃を受け止めながら、銀時の心中を推測する。

流石、銀時の絆というより、腐り縁で繋がっている桂だ。

「……神楽ちゃん。」

「そうアルな、私達がコイツらにやられたら、銀ちゃんの気持ち台無しネ。」

二人は銀時の気持ちや信頼を汲んで、銀時の言う通りにしようと思いい、顔を合わせ頷くと会場内にある避難階段に向かった。

両者、互角の勝負だった。

太刀筋は、風を斬る音や衝撃音を響かせるだけ。
時間を消耗する度、体力も段々消耗する。

数時間ぐらい経っただろう。

いくら攘夷戦争に出ていた四人でも、数時間は辛い。

額に汗を流し肩を切らしながら刀を構え睨み合っている。

後ろにある人物が来ているのを、知らずに。

また、攻防戦の斬り合いを始める四人。
ここまで来ると彼らは負けず嫌いなのか？

肉眼では、太刀筋は一つの線しか捉えきれない早さで決別の戦いが続く。

それから数分後。

高杉が桂に斬りかかる次の瞬間：

右肩に刃が貫き、床に血の雫がぽたぽたと切なく落ちていた。

第六話 終

次作予告

二十年前に宇宙からやってきた「天人」の台頭と廃刀令により、かつて隆盛を極めた侍は衰退の一途をたどっていた。

時を遡（さかのぼ）ること七年前。侍と天人の戦いはより一層激化していった。

そんな時代に若き侍達が、戦場に降り立つ。

それらの中で、ある一人の侍は後に、恐れを含み。こう呼ばれるようになる” 白夜叉”と

銀魂 銀時過去篇

「銀時、貴様はなんでも背負い過ぎだ、たまに、それを降ろして一休みすれば楽になるぞ。」

「知ってるか：どんなに満杯になった水を慎重に運ぼうとしても、必ず溢れちまう雫があるって事を。」

「のう、銀時おんしゃあこの戦いをどう見ちよるがか？」

「俺は、仲間を護るのではない先生を認めさせる為に戦場（ここに）にいるんです。」

「” 志士は溝壑（こうがく）に在るを忘れず” あなた達が立派な侍になった時、谷底に落ちても己の志を死ぬ覚悟で賭けてください。」

響く仲間や師の言葉

揺らぐ思い

仲間と犠牲の葛藤

血染めの夜叉 今宵も躍り狂う

「初対面の人に会う時は必ず名前を確認しろ」

この小説は、ご覧のスポンサーでお送りします。

提供

空知英秋

週刊少年ジャンプ

小説家になろう

応援してくださる読者の皆様

銀色の魂らんきんぐ

a u W 6 2 K 機種及び a u ショップ

新OPとED決定!!

OP 命果てるまで/ゆず

ED トレモロ/RADWIMPS

次作の詳細は……後書きにて

陸：人には譲れない物がある（後書き）

次作は、玄詠を混ぜた攘夷戦争をメインとした連載物を書こうかな
と思います…勿論

嘘です。

どうびつくりした？一回”嘘予告”ってやりたかったんです。

まさに銀魂的ノリです、間に受けた人ゴメンね

って、謝ってないようにみえるなあ……。本当にスイマセン

あ、因みにOPもEDはどちらも実在している曲なので、機会があれば聞いてください。

最後に、改めまして3000HIT本当にありがとうございました

m ((m

漆：集団で生活すると必ずひねくれものが一人いる（前書き）

作者のツブヤキ

明日から学校だ……。

漆：集団で生活すると必ずひねくれものが一人いる

「ぐあつ……。」

玄詠は、苦痛な表情を浮かべて刃が抜けた血が溢れる右肩を手で押さえ膝まつく。

白い羽織に血は映え、刀が落ちる音が大きく響き渡る。

背後の人物…謀反を起こそうとしたある隊員は、高杉の首元に突きを食らわせようとする。

しかし玄詠はそれに気づき、わざと高杉に横にタックルを食らわせ庇（かば）ったのだ。

「オイ！！久坂、しっかりしろ。」

「……っ敵に情けを掛けられるとは…俺もまだまだ半可者ですね。」

銀時は、焦った表情で木刀を腰に差すなり自嘲気味に言う玄詠に駆け寄る。

「ちっ、高杉狙っていたんだがまあいい。」

隊員は悔しそくに舌打ちをして、そう言う懐からボタンだけある、シンプルなスイッチを押す。

「貴様！何者だ。」

桂は隊員に吠える、敵とはいえやはり盟友なのか銀時と同じ気持ちになっていた。

「別にいいー答える必要はない、何故なら二時間後。このビルの崩壊と共に……」

それが隊員の最期の言葉だった。

高杉は”屍”の言葉を待たずに、戸惑いもなく首を薙ぎ斬る。

首はころんと床に落ち、喉笛半分、刈られた箇所と首は噴水の如く血は吹き出しながら前者は地面に伏せた。

高杉の着流しや頬に数カ所返り血が付く。

もし、ここに熱烈な高杉ファンがこの場を遭遇したら、黄色い声をあげるだろう。

銀時と桂は玄詠の止血出来る物を探していたが、ふとその様子に目が入り、状況を理解出来ずに思わず手を止めた。

「デメエら、何ぼさつとしてんだ…さつさと逃げるぞ。」

高杉は、刀についた男の血を払い納刀すると、誰もいない会場に向かおうとする。

「さつきの誰なんだ？それに久坂の止血をするもん探さねえーと。」

銀時は、後ろにいる高杉に問いやするべき事をぶつける。

桂はというと、包帯代わりに屍の巻いていた帯をほどいて持ってきた。

「爆弾を仕掛ける奴だ、最初（ハナ）からこの目的で推薦していたってところか……俺もナメられたモンだぜ。」

高杉は薄く妖艶な笑みを浮かべて淡々とした口調で、推測を含んだ答えを言う。

つまり、隊員は高杉の謀反が目的で爆弾を仕掛ける役に就いた。

もし失敗してもしなくても、謀反用の爆弾を爆破すれば高杉が逃げ遅れたら謀反は成功になり、証拠隠滅にもなる。

隊員の運が強かったら一石二鳥だ。

「つまり…今から二時間後、俺達ごとビルが爆破する…という事だな。」

桂は、そう言いながら玄詠の紺色の着流しを脱がして右肩にぽっかりと空いた傷に、帯を巻いていく。

「ああ、そういう事だ…ぐずぐずしてると俺達は瓦礫（ガレキ）と一緒に生き埋めだ。」

高杉は、扉を開けて会場に入ろうとする。

「おい、高杉：久坂どうすんだよ。」

銀時は、久坂を助けようとしないう高杉の態度に疑問が沸いて問う。

「……怪我人なんざただの足手まといだ。」

高杉は平然とした態度で言い放ち、会場の中へと消えた。

「高杉!!」

桂は怒りを露（あらわ）にして、そう言う。
仲間思いというヤツだろう。

「晋助の言う通りです、俺に構っていたら…時間の無駄ですよ。」
「しかし……。」

「それにこの傷、じき大量出血で死にます…よ。」

玄詠は死を覚悟したのか、優しく微笑みながら言う。

肩に巻いている帯は、滲み初めていた。

「二人共、逃げてください俺を助けたら労力が増えます。」

玄詠は桂を左手で強く押した。まるで「行け」と言っているように。

その様子を見た銀時は、玄詠に近づいた。

刹那

「よし…ッラ、逃げるぞ!!」
「ッラじゃない桂だアア!!」

銀時は素早く、啞然とする玄詠を背負い会場の扉に向かって駆け始めたのだ。

勿論、黙ってられない玄詠は、上に結わえた艶やかな黒髪を風に靡（なび）かせながら口を開いた。

「降ろしてください！！貴方達に負担はかけたくないんです！！」

「五月蠅エエ！！ごちゃごちゃと喚（わめ）いてる暇があれば、喚かない方法をちったあ考えろ！」

銀時は、クワツと怒りの表情で玄詠に活を入れた。

「久坂諦めろ……こやつは、スイッチが入っている。もう止められないぞ。」

桂は、何故か忍者っぽい走り方で結わえてはいないが、玄詠と同じ艶やかな黒髪を風に靡かせながら玄詠にそう話す。

「……ツラ、なんですか？その走りは？」

「ツラじゃない、忍者だ。あ、間違った桂だ。」

お決まりの台詞をあれほど連呼しといて、訂正をする桂だった。

銀時は、会場の扉を一応怪我人お構いなしに、鋭い飛び蹴りでぶち破った。

第七話 終

漆：集団で生活すると必ずひねくれものが一人いる（後書き）

アトガキ劇場

幼少時

「しーんちゃん。」

「そのあだ名で呼ぶなアア！！」

攘夷戦争 鬼兵隊

「総督（そうとく）……いや、晋ちゃん。」

「テメエ……さらりと間違っている事を修正するな。」

現在（イマ）

「晋ちゃん。」

「……………」

「晋ちゃん」

「……………」

「晋……あちちっ！！」

脳天に吸いかけの煙管が命中し、まだ燃えている刻み煙草が掛かった。

捌：急いである時にゲダクダやっていると、時間はあっという間に過ぎて遅刻する

4000HITありますが…… m () m

今回のオマケは…… 秘密です。

作者のツブヤキ

何で”モノホン”を、逆にしたのかなあ……普通に本物って言うて
くださいマジで……！

捌：急いでる時にゲダクダやっていると、時間はあっという間に過ぎて遅刻する

ドアが轟音をたてて崩れ落ち、中にいた高杉は刀に手をかけて警戒をする。

埃が舞う中、銀時は玄詠を背負っていつもの調子でこう言った。

「よう高杉、お前も来てた……ゲホッゲホッ！」

五話の高杉登場の台詞を言うようにしたが、砂塵を吸い込み、むせ返ってしまったのだ。

折角、カッコよく決めるシーンが台無しだ。

「銀時、決める時決めないでどうする。」

「そうですね、貴方は昔から中途半端でしたからね……後俺一応、怪我人ですよ。」

桂、玄詠からブーイングを浴びた銀時は「大体、」負担をかけたくない」とあんだだけ、文句言つといて……そんな事が言えるな。」

「いやー、貴方のお言葉に甘えさせて貰いました。」

玄詠は満面の笑みを浮かべ、抑揚を利かせた口調で開き直る。

「意思が弱えー奴だな……そんなんだから、毒矢刺さって視力落としたん……痛ででで。」

「俺の不注意と意思と一緒にしないでください、まあ禿（は）げたのなら……一緒にしても構いませんが。」

銀時の発言が癢に障ったのか、髪を力強く掴んで引っ張って笑顔のまま声色を少し落して言う。

いくら女性によっては顔を紅潮しそうな笑顔でも、声色と行動が恐怖に包まれたら、逆に顔を蒼白に染めてしまう笑顔に大変身する。

「死ぬと言ったくせに……元氣爆發じゃねーか。」

「銀時、人間切り替えが大事なんですよ……あの時は”死”を覚悟していましたが……今では貴方のお陰で”希望”が見えましたよ。」
優しく微笑みながら、玄詠なりの礼を言う。

その表情は門下生時代の玄詠を、思い出させるモノだった。

「本当に……ほんのちよつと、歪み修正してるな。それだけ”あの”の影響は強かったのか？」

「まあ、そんなモノですよ。」

二人の間に、ほのぼのした空気が流れ、残された二人を遮断していた。

「茶番はここまでだ、さっさと行くぞ。」

高杉にとって爆発までの時間を、こんなくだらないやり取りを裂きたく無いのか。

苛々としながら二人を急（せ）かし早足で歩く彼を、三人は後ろに列を作って後を追った。

「ところで……晋助、まさか俺の為に謀反を起こした奴を斬首したワケじゃないですね。」

「俺ア：ただ貸しを返したただけだ。」

「本当、晋ちゃんは素直じゃないですね…」助けてくれてありがとうございます」と言えないんですか？」

鉄パイプを組み合わせ、鉄板出てきた非常階段で高杉はにこやかに笑う。

玄詠の発言を聞いて、足を止め彼に睨む為振り返りこう言った。

「あ？」

「さあ、茶番はここまでですよ……早く逃げましょう。」

玄詠は右肩を押さえながら、高杉を宥めて降り続ける。

現在、三階。脱出してから二十分ぐらいが経過。

三人共疲れの色は見せてないようだ。

「この二人：昔から変わってねえーな。」

「うむ、仲がいいのか：悪いのか分からぬな。」

「中身は似た者同士だからな：アイツら。」

銀時と桂は緊張感の欠片もない、他愛のない会話をしていた。
その時。

「コイツと俺が似てるだど？」

「全く、同感ですねえ：どこが似てるのか答えてください二十秒以内に。」

二人は、銀時の言葉を聞いて同時に振り返り、妖艶な笑みを浮かべて黒いオーラと殺気を放つ。

正直に答えると、間違いなく殺される。

「……。」

ツートップは、ひきつり顔を見合わせて無言で答えた。

二人は、それを見て問いても無駄だと悟ると。

同時に舌打ちをし黙々と先頭を歩き出した。

それから、彼らは会話を交わさず地上まで後少しの所で、流血のし過ぎで顔を蒼白染める玄詠は口開いた。

「……もしかして、俺達が一步降りたらドカンと爆発するんじゃないですか？」

「そうだったら…小説的に盛り上がるな。後、貴様顔色悪いぞ。」

桂は、心配そうに玄詠を見据える。

「だ…大丈夫ですよこれくらい。」

玄詠は心配掛けまいとぎこちなく、いつもの笑みを浮かべて強がる。

「……。」

高杉と銀時は、玄詠が強がっていると見抜いたが、黙って歩を進めた。

そして、避難階段を降りきり。

四人は、会場の人達や田辺以外の警備員を帰させた後、ずっとその場に待っていた。

新八、神楽達と合流し、ビルが万が一倒れても届かない地点まで歩いた。

そこに辿り着いた途端。

ビルから地面が震え上がりそんな轟音が江戸中に響き渡り。

そして柱を壊されたビルはジェンガの如く倒れ、ガラスや鉄筋が叩きつけられる音が遠く離れた此所でさえ、大きく響いた。

「派手に倒れたなー。なあ…久坂。」

銀時は呑気にビルを傍観し、隣にいた玄詠に話し掛けようとする。

「……。」

銀時の問いに答えず。

真っ青になった玄詠は崩れるように、その場に倒れ、意識を失った。

原因は、高杉に謀反を起こした隊員の攻撃を彼から庇（かば）った時に出来た傷だった。

第八話 完

この後は、オマケSSだよ。

三年Z組 銀八先生

「気にする奴より、気にしない奴の方が物事やりやすい」

「そんな筈（はず）は……。」

クラスは三年Z組所属、上はレンズむき出しの四角い眼鏡を掛けた伊藤鴨太郎は。

掲示板の前に貼られた大きな紙を見上げてショックを隠しきれないのか、思わず本音を呟く。

この紙は、三年生の「男子別、テスト総合成績順」に書かれているモノだ。

見間違いかも知れないと、鴨太郎は確かめるように己の名を探す。

【一位 Z組：久坂玄詠 498点

二位 Z組：伊藤鴨太郎 497点

三位 Z組：土方十四郎 486点

三位 Z組：高杉晋助 486点……】

そう鴨太郎は、初めて学年二位を取ったのだ。

しかも一点差で、さぞがし悔しいだろう。

「……もっと勉強して。久坂君に、必ずか勝つ!!」

と鴨太郎は、腹黒い笑みを浮かべて打倒玄詠の目標をたてた。その時、成績表と鴨太郎を素通りし、下校する玄詠の姿があったとさ。

玖：人には皆、それぞれ帰る家がある（前書き）

5000HIT&今までありがとうございます。

本日、この話を持って＜事実上＞最終話でございます。

え？事実上って？

それは、内緒です。

それではどうぞー！！

作者のツブヤキ

眠い……。

玖：人には皆、それぞれ帰る家がある

「……ここは？」

玄詠は、起き上がり視界がぼやけているが見慣れた世界を見渡して、ぼそりと呟く。

「氣いついたな……ここまで運んできた俺に感謝しろ。」

鬼兵隊アジト内にある医務室まで彼を運んだ、高杉は入り口にもたれ煙管を吹かして流し目で。

素眼の、常夜を閉じ込めたような黒髪は腰まで垂れ下げている玄詠を見る。

「……あ、晋助でしたか俺は、てっきり黒髪のギンコだと思いました。」

側にあつた、四角い黒縁眼鏡を掛けていつものように微笑む。

「作戦は失敗したが……、裏切り者を処罰したのがせめての救いだなククッ。」

高杉は作戦に失敗しても、落ち込まず。

喉を鳴らし不敵に笑って言うと同時に、何かを思い出して懐を探る。

「ほらよ、落としモンだ……。次は落とすんじゃないよ。」

玄詠が倒れた時、懐から出た松陽の教本を玄詠の膝元に投げ渡すと、雪駄の摩る音を響かせてその場を去った。

高杉は、己の教本は大切に扱えるが、他人の教本なのでどうしても扱いが雑になってしまう。

「……懐かしいですね。」

玄詠は無言で高杉を見送ると、あるページを捲って挟んであるモノを眺めて目を細めて懐かしんでいた。

それは、松陽先生を挟んで幼少時代の鼻をほじる銀時。起立をして固い表情の桂。

そして、両者髪を引つ張り、もう片方の手に頬を押し合いして喧嘩をする高杉と玄詠の姿が写されていた写真だった。

「皆、バラバラになってしまいましたね……。」
玄詠は、遠い目をして哀し気な声色で呟いた。

窓には螢（ほたる）の様に静寂を保ちながら、粉雪が舞い落ちていく。

それは、本格的な冬の到来を告げた。

場面が変わりまして一方、万事屋は……

「銀ちゃん、雪が降っているアルヨー!!」

田辺さんから報酬を貰った、帰り道の途中。

神楽は雪を番傘から覗くと同時に、嬉しくなってはしゃぐ。

「そーだな、オイ新八。コタツ出しとけ、あ。後ミカン一箱買っとけ。」

「何の嫌がらせですか……銀さんも手伝ってくださいよ。」

舞い散る雪を眺めながら、銀時は面倒事を新八に押し付けるが、ツコミによって返された。

「ついでに…雪かきも頼むわ。」

「人使い荒いのも、いい加減にしろ！！だいたい、雪かきする程。積もらねえーよ！！」

新八はシャウトして、またツツコム。

毎日ツツコンで…疲れないのか？

新八に、アルナミンA錠剤を送りたいぐらいだ。

「あ？だりイんだよ、冬の支度すんの。」

銀時は、気だるげな表情で鼻をほじり始めた、次の瞬間。

「うわっ！！」

新八は神楽が”力一杯”投げた雪玉に顔面直撃して、眼鏡のレンズは雪を積もらせる。

体はよろめき、悲鳴をあげて鼻血が止めどなく流れ出た。

因みに玉のスピードは、大リーガーもびっくりする程速かった。

これは痛い…とりあえず、アソコに当たらなくてよかったね新八。

「何するんだ！神楽ちゃん！！」

新八の抗議に、神楽はしれっとした態度でこう答える。

「蚊。」

「神楽ちゃんンンン！？この季節に、蚊なんていないよ！！」

「じゃあ…ノロウイルス。」

「細菌かよ!!」

神楽は、新八のツツコミに気を留めず、次の雪玉を作って投げるが、新八は避ける。

だが、最悪な事態になるとは彼らは予期もしなかった。

「……お前ら死ぬ覚悟はできてんだろうなアあ、あ？」

命中したのは、雪玉を避けた銀時の顔ではなく。

たまたま、銀時の後ろにいた。

通りすがりの強面（こわおもて）のガタイ、ヤクザでした。

アレ？ 作文？

兎に角、ヤクザは物凄い怖い顔で黒いオーラを放ちながら手を鳴らす。

万事屋トリオ、絶対絶命のピンチ!!

「死ぬ？俺はいつでも死ぬ覚悟で、生きてるぜ!!」

銀時は、若干。相手のオーラに圧されるが、後退り。

カッコいい台詞を吐くと同時に、新八達を連れて猛ダッシュで逃げ

た。

ヤクザは怒りを露（あらわ）にして、万事屋トリオを追いかけていた。

「……相変わらず、騒がしい奴らだな。」

その時、桂はビルの屋上で双眼鏡で、四人の様子を見て思わず呟く。

「さてと、エリサベス…家（うち）に帰るとするか。」

艶やかな黒長髪を強風に泳がせながら、双眼鏡を懐に入れ。

エリザベスと呼んだ、ペンギンのような白い謎の生き物と一緒に、部下が手配してくれたヘリコプターに乗り込んでその場を飛び去った。

形が違えど…彼らが築いた絆は深く繋がっていた。

完

玖：人には皆、それぞれ帰る家がある（後書き）

5000HIT記念に、番外編を一話書いて…この小説を終わらせようかなと思います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8344f/>

銀魂【会食襲撃篇】

2010年10月10日17時00分発行